

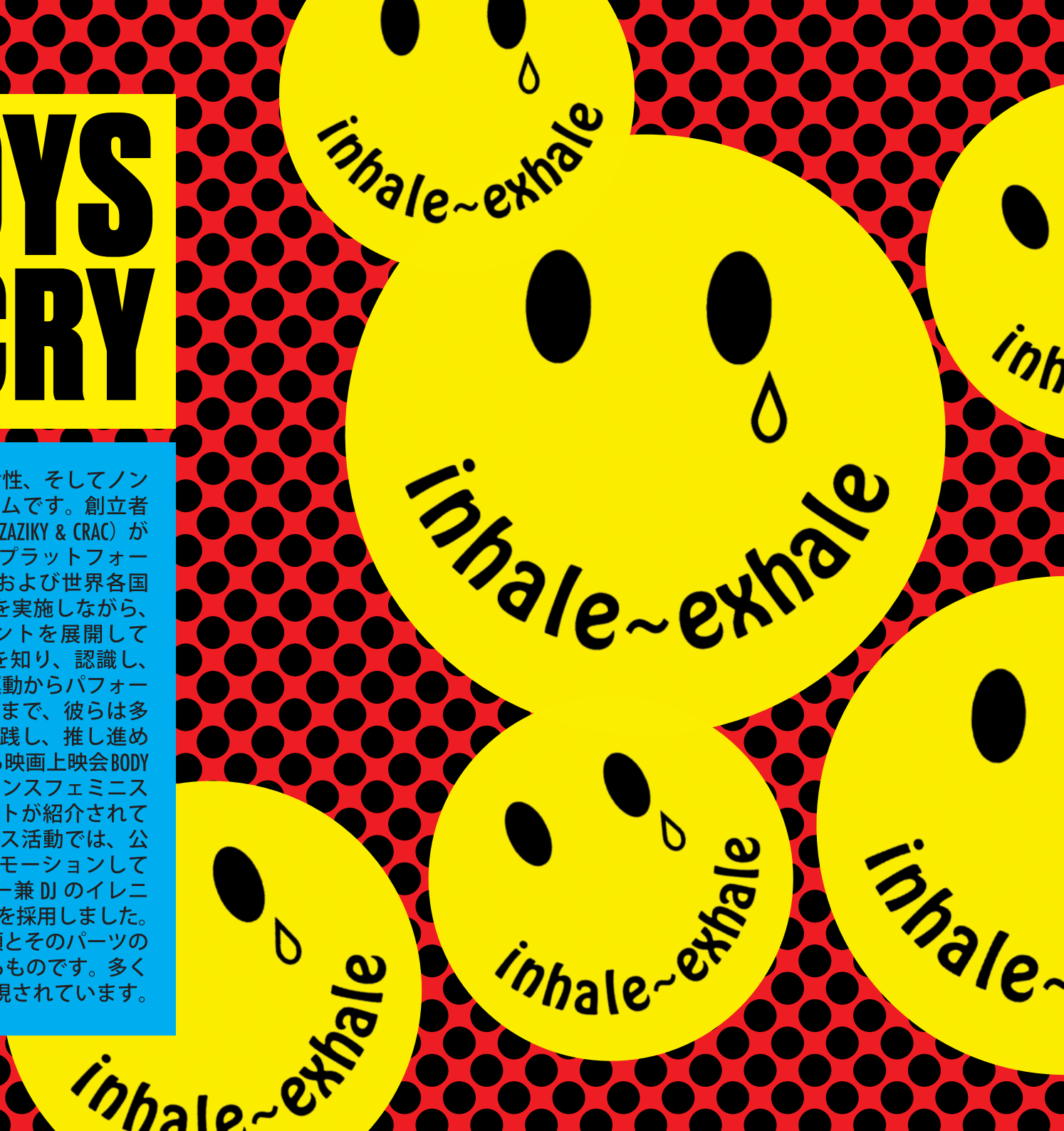
TO GATHER TOGETHER

今こそ変化の時だと言われています。制圧的なシステムや、参入を拒む障壁を壊すことのできる時がいよいよ訪れたと。現実の世界では、すでにかかなり前にこの瞬間が訪れ、ムーブメントが始まり、取り組みがスタートしています。変化は、入念に計画された時刻表に沿って起こるわけではありません。変化は、社会の隅に追われた人々が、それを求める時に起こります。今号には、世界各国でジェンダーの平等を求める人々の声が集まっています。そのためにこれまで闘ってきた人々、今も闘っている人々、そしてこれからも闘い続ける人々の声。記事はそれぞれ個性豊かで、寄稿者の拠点も様々です。しかし、彼らは「変化は孤立した出来事ではなく、私たちがそれを求める時に起こる」という根本的なテーマを共有しています。変化の始まりを告げるチャイムが聞こえたら、「To Gather Together」を掲げて力を合わせ、変化を起こしましょう。 アダム・イーライ

TOMBOYS DON'T CRY

泣かないで、トムボーイ

Tomboys Don't Cryは、あらゆるジェンダーの女性、そしてノンバイナリーの人々のためのプラットフォームです。創立者のマーク (S/HE) とダフネ・ボジェーリ (TZAZIKY & CRAC) が今号の表紙デザインを担当しました。このプラットフォームはミラノに拠点を置き、2011年から地域および世界各国のDJやアーティストとのコラボレーションを実施しながら、ポスト・アイデンティティの活動とイベントを展開しています。その創立理念の一つが「お互いを知り、認識し、時には一緒に道に迷う」というもの。抗議運動からパフォーマンス、Tシャツやステッカー、そして音楽まで、彼らは多彩な形態やメディアを使ってこの理念を実践し、推し進めています。例えば、彼らが毎年行なっている映画上映会BODY LANGUAGEでは、インターセクショナルやトランスフェミニストクィアに関する様々なビデオプロジェクトが紹介されています。また、NAIL BAR というパフォーマンス活動では、公共スペースで即興的なネイルアートをプロモーションしています。今号の表紙には、フォトグラファー兼DJのイレニア・アロージオが創作した一連のフィルターを採用しました。眉毛の形を変えるこれらのフィルターは、顔とそのパーツの間にある特別な関係に気付くきっかけとなるものです。多くの人が違和感を感じる一本眉も、美しく表現されています。





EYEBROWSING #3

@ILENIAAROSIO による @TOMBOYSDONTCRY のためのフィルター：写真は @MERONKIDANE



EYEBROWSING #2

@ILENIAAROSIO による @TOMBOYSDONTCRY のためのフィルター：写真は @ELEONORAAROSIO



**YOU WILL
NEVER
WALK ALONE
AN UPRISING
IN POLAND**

OLA JASIONOWSKA - KAROLINA GEMBARA - JOANNA MUSIAL

あなたは決して一人で歩くことはない：ポーランドの市民運動
オーラ・ヤシヨノスカ カロリーナ・ゲンバラ ヨアンナ・ムーシャウ

OLA JASIONOWSKA

社会運動では昔から、そのメッセージを発信し、支援を広げるために、視覚的な要素、シンボル、そしてアートが使われてきた。例えば、先住民女性の失踪と殺害という惨事は、赤い手形や、先住民の伝統的な衣装を着た女性の赤いシルエットで表わされる。黒と白のガイ・フォークスの仮面は、反体制運動の国際的なシンボルだ。ポーランド全土の女性によるストライキのために創作した作品について、そして社会運動におけるシンボルの重要性について、アーティストのオーラ・ヤショノスカに話を聞いてみよう。

アダム・イーライ：あなたはどのようにこのシンボルを考えついたのですか？ オーラ・ヤショノスカ：赤い稲妻のシンボルは、ポーランド全土の女性によるストライキのロゴの一部で、2016年からこの運動全体の特徴的なビジュアルランゲージになっています。女性たちによる影響を示す総合的な図案を創作するというのが、私の狙いでした。そこで女性のシルエットと赤い稲妻を組み合わせ、パワーと警告を同時に表現したのです。静と動という対比する2つの要素が、このシンボルの中心的な力になっていると思います。

このシンボルがこれほど広く使われているのを見て、どう感じますか？ 稲妻がこんなに広まった理由はいくつかあると思います。稲妻の背後にあるビジュアルメッセージは理解しやすく、何よりも平和的です。そして、写すのも、再現するのも簡単。メイク、Tシャツ、刺繍、そしてタトゥーまで、人々が自作した稲妻の例をたくさん見てきました。最後の理由は、利用しやすいこと。ポーランド全土の女性によるストライキで、私たちは人々にチラシを配布しました。抗議運動のために、誰もが簡単にこのシンボルを印刷したり、私たちのグラフィックキットを使えるように。街を歩いていて自分の作品を目にすると、ほかでは味わえないような嬉しさを感じます。

社会運動でシンボルが重要なのはなぜでしょうか？

ポーランド政府は人工妊娠中絶をほぼ全面禁止とし、私たちから意思決定の機会を奪っています。国内メディアはフェイクニュースを報道し、抗議運動に関する誤った情報をたくさん流して私たちを混乱させています。しかし、シンボルがあれば、人々は自分自身よりも大きなものに所属しているのだと容易に感じる事ができる。抗議運動の視覚的な象徴として、人々のアイデンティティの一部となっているのです。このシンボルは、デモ行進の最中に所属意識を示すためだけのものではありません。ポーランド市街を歩くと、テープで窓に張られた赤い稲妻のマークがあちこちに見られます。私はワルシャワ市役所のグラフィックデザイナーで、私の仕事は、特に屋外でのキャンペーンを実施して、ワルシャワの街をもう少しだけ美しくすること。周囲の環境が人々の心身の健康に影響を及ぼし得ることを、私は知っています。あなたが街を歩きながらふと視線を上げた時、5、10、あるいは50もの窓にこのシンボルが示されていたら、私たちが心から必要としている連帯感のようなものを感じることができるでしょう。

あなたが、ポーランドという国について、世界に知ってほしいと思うことは？ 中絶禁止法に関する裁判所の判決は極めて残念なのですが、それだけではありません。現在私たちは、自国の政府と教会に起因する様々なレベルの膨大な不寛容に苦しめられています。私たちはただ、人権を求めているだけ。女性の権利、LGBT+の権利、中世の迷信ではなく、現代社会に従った生活をする権利を。ポーランドは、愛情深く、物事の創造に秀でた素晴らしい人々から成る国でもあります。私たちは気候変動と闘い、画期的な解決策とごく当たり前の平和を求めています。私たちは今や、この不安定な国の住民というよりも、世界市民なのです。

KAROLINA GEMBARA

私は2016年から抗議運動に携わっている。これほど大声で叫ぶ必要にかられたことは、かつてなかった。「これは私の身体、私の選択だ！口を出すな！」と。自分自身が人前に出て、基本的な権利を要求しなければならないと思ったことも、かつてなかった。私は人生の大半を民主主義の国で暮らしていたので、今は何もかもが新しく、恐ろしい。時々、疲労や恐怖があまりにひどく、外に出られないことがある。でも、私はほかの女性たちとの強固な連帯感を感じている。彼女たちを、一人で歩かせはしない。共産主義のポーランドは非宗教的国家で、女性たちは不要な非難を受けることなく、自らの妊娠を中絶できた。しかしポーランドが共産政権を棄てた時、革命の背後にあった民主勢力がカトリック教会と手を結び、キリスト教の伝統を重んじた規制の制定を主教たちに約束した。1993年のいわゆる中絶妥協案では、妊娠中の女性の生命や健康が深刻な危機にさらされる場合、検察官が確認したレイプや近親相姦の場合、出生前診断で胎児に深刻かつ回復不能な異常が認められる場合に限り、人工妊娠中絶を合法とした。実際には、そのような例外的なケースでもしばしば不当とされ、金銭を支払って行なわれる違法の中絶手術や、外国で処置を受ける女性が増加した。その結果、ポーランドの人工妊娠中絶法は、パチカンのような超宗教的な国々と同等になった。2015年、穏健派政権が選挙に負け、右翼勢力が当選した。





与党のPiS（法と正義）は、外国人排斥、反EU、同性愛嫌悪などの過激な思想に基づく変更を行なったほか、人工中絶法の厳格化を発表した。我々女性たちは、「Black Protest（黒い抗議）」や「Women's Strike（女性ストライキ）」の名のもとに、街の通りを占拠した。これらの集会は大規模で、LGBTグループ、リベラル、進歩派のカトリックから支援を受けた。金属の衣類ハンガー、傘、黒い服という新しいシンボルが誕生したのはこの時である。女性たちによる団体は地域組織を構築し始め、教会と国家の分離などの新たな要求を掲げた。女性たちの中には合法的な中絶を求めた者もいれば、「妥協案」を擁護した者もいた。驚くべきことに、政府は新たな提案を延期した。しかし、抗議活動が違法になれば、政府は再び動き出すだろうという見方が大半だった。2020年10月、パンデミックのさなかに公的な（しかし違法の）集会禁止令が出されると、政治色の強い憲法裁判所が、胎児の先天的な異常を理由とした人工妊娠中絶はポーランド憲法に違反するという判決を下した。同日、私たちは裁判所に出向き、怒りを表明した。それからの数日間で、抗議運動が全国に広がった。人々は、ごく小さな町でも抗議をした。ワルシャワでの最大のデモには10万人以上が集まった。デモ行進は、反対派やネオファシスト、そして悲しいことに警察に攻撃された。今日に至るまで、ポーランドの様々な場所で、封鎖、集会、連帯活動、デモが行なわれている。特に、2021年1月終盤に裁判所による判決が正式に発表されて以来、その勢いが強まっている。人工妊娠中絶に賛成するスローガンに加え、人々は政権の退陣を要求している。最近の調査では、社会の約70%が女性によるストライキを支援し、そのうち30%はPiSに投票した人々であることが示されている。この状況が将来どのように展開していくかを予測するのは極めて困難だ。特に、イタリア人哲学者ジョルジョ・アガンベンが「例外状態」と称する事態、すなわち社会的な対立が健康

と生命を剥奪するような場面を政府当局が生み出している場合には¹⁾。アガンベンという言葉「ホモ・サケル」は、権利を喪失し、人間性を奪われ、生物的に管理され、自身に対するあらゆる暴力（拘束、迫害、暴行、拷問）が、安全という名目で当たり前になっている人間を指す。この恐るべき状況にも関わらず、女性たちの抗議と抵抗は、研究、社会、そして視覚分析にインスピレーションを与える現象となっている。「あなたは決して一人で歩くことはない」というスローガンのもとで、新たな意味を持つ連帯感が生まれている。デモの際には行く先々で支援が寄せられ、デモ隊に紅茶がふるまわれ、警察が参加者を袋小路に追い込もうとする時には、フェンスを乗り越えるのを助けてくれる人々がいる。拘留された抗議者の解放を手助けする弁護士、負傷者に金銭的な寄付をする人々、ソーシャルメディアを使って抗議者たちがお互いに助け合う方法を知らせるオルガナイザー、ボランティアでデモに参加する医者もいる。独立したジャーナリストやアーティストたちは抗議運動を記録し、ライセンス不要で素材を利用できるプラットフォームの設立をサポートしている。The Archive of Public Protest は無料画像を提供し、バナーおよびポスターとして機能する刊行物を発行している。Women's Strike のビジュアルおよびバーバルコンテンツは、不満、意志、尽きることのない創造性を反映したものとなっている。共産主義後の変革が始まった時に私たちみんなが思い描いた、良識があり、選択が認められる市民社会。今の動きが、その到来に向かって進んでいることを願う。

あなたも応援しませんか？ その方法：ABORTION DREAM TEAMに寄付をする／地域のWOMEN'S STRIKEまたはDZIEWUCHYグループを探す、あるいは彼らの抗議運動に参加する／厚紙で赤い稲妻のシンボルを作り、自宅の窓に掲げる

¹⁾ ジョルジョ・アガンベン、『Homo Sacer: Sovereign Power and Bare Life.』(1998年)および『State of Exception.』(2005年)



THE FIGHT AGAINST FEMICIDE IN TURKEY GÜNSELİ YALCINKAYA

2020年7月、Instagramでとある流行が生まれた。女性たちが#ChallengeAcceptedというハッシュタグを付けて白黒のセルフィーを投稿し、「女性たちをサポート」するために他の人にも同じことをしてほしいと伝えるための「チャレンジ」だった。同じ頃、27歳のクルド人学生、ピナール・グルテキンの遺体が樽の中で発見された。この残忍なフェミサイドに関連するハッシュタグを付けた投稿も、大きく広がり始めていた。トルコのアカウントの中には、このチャレンジとイスタンブール条約を結び付けたものもあった。これは、ジェンダーに起因する暴力や家庭内暴力の被害者を守るために制定された法的な枠組みである。レジェップ・タイップ・エルドアン大統領と保守派の公正発展党（AKP）は、「家庭の伝統」を脅かすとして、この条約から脱退しようとしたのだ。多くのセルフィーが撮影され、解説画像が拡散されたが、アクティビストたちが各自のプラッ

トフォームを使ってこの問題を提起する一方で、このチャレンジの発祥に関する意見の相違が表面化すると、その勢いは失速し始めた。ピナール・グルテキンの痛ましい事件、そしてトルコでフェミサイドの犠牲となった数え切れない人々が、デジタルスペースの中に消えていった。今もなお、フェミサイドに対する闘いはかつてないほど重要性を増している。このソーシャルメディアキャンペーンが生み出した国際的なプレッシャーにより、イスタンブール条約からの離脱というトルコ政府の計画は一時的に中断されたが、女性に対する暴力は途絶えることがなく、現在も続くパンデミックによって悪化している。昨年、トルコで300件のフェミサイドが発生し、疑わしい状況で死亡した女性の数は171人にもものぼった¹。2020年に殺された女性の60%が、自宅で命を奪われた。アイリーン・ソゼル、セルダ・タシュ、ヴェシレ・ドンメズ、ヴェトウル・トゥールクという4人の女性が殺された事件に抗議するため、12月にアンカラ市街で平和的なデモが行なわれた時、警察は7人の抗議者を逮捕した。抗議者に対する警察の容赦ない暴力に加え、政府はフェミサイドの徹底的な調査と各事件に関する透明な情報提供を拒否し、イスタンブール条約の実施を怠っている。2020年、数年にわたる抗議の後、We Will Stop Femicide Platformのアクティビストたちが、内務省にフェミサイドに関するデータを公表させた。これは意識向上につながるポジティブなステップであったが、その数値は保守的な推測の域を出ず、多くの死因が事故や自死として扱われている。議論の余地こそあれ、フェミサイドを減らす最も重要な対策の一つが、イスタンブール条約やトルコの国内法第6284号のような法規を施行することだ。この法令は、短期の避難所、一時的な禁止命令、経済的な援助などの様々な支援を提供し、女性たちを暴力から保護するものである。昨年、国内法第6284号に基づく禁止および保護命令によって保護を受けたフェミサイド被害者は、わずか23人だった。こうした警察の動きの鈍さは、

イスタンブール条約と国内法第6284号のあからさまな不履行を示している。仮に罰則が課されたとしても、男性への刑罰はしばしば軽減される。しかしほとんどの場合、暴行通報の多くが完全に無視される。事件が有罪となっても、裁判官が男性受刑者の外見といった独断的な基準に基づき、刑期を短縮するのが常である。トルコではこのような現象が頻発し、「ネクタイ減刑」と呼ばれるまでになっている。こうした動きは、これらの法規で保護されるべき女性たちを疎外するだけでなく、女性をないがしろにすることによって、暴行の加害者たちを援護するものだ。女性たちを確実に保護するには、法律を施行してそれに準拠し、これらの規定に従わない公務員を処罰しなければならない。女性たち、そして女性が社会で担う役割に対する凝り固まった性差別的な見解を変えようとするなら、教育が必要となる。統計や報告を公表したり、ソーシャルメディアに投稿して国際的なプラットフォームを活用するといった手段によって、問題に対する意識を高めることも有効な方法だ。教育は名誉殺人の発生が多い地域で特に重要だが、一般的には、暴行を短期的に防止する上で、国や女性向けの組織が提供する保護対策、そしてそうした保護を受ける権利について、女性たちに情報を提供することが極めて重要である。「女性たちが強くなるということは、各自が主体性を持てるように力を与えることだと、私たちは信じています。なぜなら、社会的、また文化的な階級により、自分の判断で行動を起こす機会が極めて限られている女性もいるからです」と、女性保護施設 Mor Çatı (紫の屋根) のアクティビストであるセリメ・ブユクギョゼは言う。Mor Çatıのようなグループは、危機的状況にある女性たちに合法的な支援を提供したり、トルコの女性たちに自身の権利について教えたり、イスタンブール条約の施行に向けたキャンペーンを実施している。「非常に基本的なことだと思われるかもしれませんが、最もよくある問題の一つが、女性たちが暴行を報告した時ですら、話を聞いてもらえないというものです。私たちは、一切批判を

受けることなく、彼女たちが自らの体験を語ることでできる場所を提供しています。そして、その人に何が必要かを分析し、解決策を提案します。例えば、女性が持つ権利や、それを活用する方法について教えます」と、ブユクギョゼは説明する。女性向けのシェルターは、女性たちの自主性を守る長期的な方法も提供する。「通常、女性たちが必要としているのは、暴力からの避難だけではありません。彼女たちが暴力から逃れた後に新生活を始めると、別の問題に直面します。なぜなら、暴力は女性たちの命を脅かすばかりか、彼女たちが日常生活を送り、人生を歩む能力をも奪うからです。私たちが支援する女性たちの大半が、経済的・社会的権利を剥奪されています。そのため、女性たちが約4ヶ月間滞在できる Solidarity Center では、女性たちが長期計画を立てられるようにサポートします」と、ブユクギョゼは言う。現在は、フェミサイドと闘うために活動している現場のアクティビストや、評価の高い組織からの声を聞くことが重要だ。Mor Çatı や Small Projects Istanbulのような女性のためのシェルターに寄付しよう。オンラインフォームから We Will Stop Femicide に寄付をし、彼らのメッセージを広めよう。女性たちのためにリーダーシップを取り、技術トレーニングを提供する非営利団体 HasNa に寄付したり、ボランティア活動しよう。Turkish Women Union に寄付して、彼らの Girls Not Brides キャンペーンを支援しよう。このキャンペーンでは、児童婚を根絶するために、100以上の国から1300を超える市民社会団体が国際的なパートナーシップを結んでいる。TCK-103 Women's Platform Against Amnesty for Child Sexual Abusers もまた、文書を作成し、AKP中央執行委員会の主要メンバーのEメールアドレスを提供することで、彼らがイスタンブール条約を適切に機能させるよう訴えている。最も重要なのは、私たちが自らのプラットフォームを使ってこれらの組織の活動を広め、この問題に関する国際的な動きの勢いを取り戻すことである。

MELEK ÖNDER

メレック・エンダー

女性の権利を擁護する団体としてトルコで最も重要な組織の一つ、We Will Stop Femicideの広報を担当するメレック・エンダー。彼女はジェンダーに起因する暴力を扱う訴訟の監視を支援し、リソースを作成しながら、トルコで男性に殺された女性たちに関する訴訟のデータベースの維持と管理を行なっています。この運動の最前線での活動、フェミサイドを防止するために必要な対策、そして外国にいる人々が支援を提供する方法について、CHIMEがメレックにインタビューしました。

ピナル・グルテキンの死によって、トルコ国外の多くの人々がフェミサイドの現実を知りました。世界から寄せられた関心によって、日常生活に変化がありましたか？ 残念なことに、女性たちは毎日暴力や死に脅かされています。そして、ピナルが命を落としてからも、トルコではさらに多くの女性たちが殺されています。時の経過とともに、殺人の形が変わっていています。より暴力的になり、政府の怠慢に気付いている殺人犯たちは、刑罰を受けることなくこのような犯罪から逃げ切れると考えています。例えば、ピナルの殺害犯は、自分の身に何かが起こるとは思わないとはっきり公言しました。ピナルの遺体をゴミ箱に入れて焼き、セメントを流し込んで隠したことを、あたかも事故のように見せようとしたのです。別の事件では、私たちの仲間であるシュレが、レイプされた後、自殺と見せかけるためにビルの20階から投げ出されました。昨年と比較し、殺害された女性の合計人数は増加していませんが、疑わしい死を遂げた女性の数は増えています。このような死はまともに捜査されません。当局が迅速に対応しないせいで、時間の経過とともに証拠が消えてしまいます。当局に対応してもらうには、被害者の家族が捜査を強く要求しなければなりません。状況によっては、そう簡単に動けないこともあります。

イスタンブール条約や国内法第6284号のような法規は、フェミサイドの防止に関しどの程度重要ですか？ イスタンブール条約には、女性たちの死に関連するこうした事件の追跡調査も含まれています。政府は第6284号のような法律を無効にしようとしたましたが、ピナルの殺害を受けて人々の怒りが頂点に達し、トルコ全土の女性たちがこれらの法規について自ら学び始めました。自分自身を守るために必要だと誰もが感じているからです。政府は女性たちをないがしろ

にしています。家庭内暴力に関し、女性たちが軽んじられているならば、平等を求めて闘うべきでしょう。しかし、フェミサイドは現在最も緊急性が高い問題なので、私たちはこれに集中しています。

あなたたちにとって、今の差し迫った目標とは？ メディアがこの問題に注目し続けるよう仕向け、粘り強い姿勢を持つことが必要です。私たちはデモをしたり、メディアを利用したり、自分たちの声を海外に向けて発信して、関心が途切れないようにしています。この問題の根底には、不平等があります。システムが崩壊しており、司法制度も警察もともに機能しません。女性たちが自ら訴えを起こせるような機関が必要です。私たちの発言を記録し、真剣に受け止めてもらえる場所が。女性たちが危険から逃れられる住居も必要です。私たちは、もしみんなで闘い続ければ、この目標を達成できると信じています。政府の代表者たちがきちんと仕事をしないなら、その報いを受けなければいけません。

政府に国内法第6284号とイスタンブール条約を施行させるために、私たちができることは？ 私たちは、女性の権利保護を専門とする省を別途設立すべきだと考えます。現在は労働省の管轄ですが、リソースが不足しています。トルコはほかにも失業という大きな問題を抱えており、同省はこれも同時に扱っているからです。政府は、殺害された女性たちと、疑わしい死を遂げた女性たちの統計を提供するだけです。しかし、これでは不足です。こうした死を防ぐために政府がほかにどんな対策を講じているか、私たちは知らねばなりません。現在まで、政府はフェミサイドが問題となっていることすら公に否定していました。政府にこれを認めさせ、行動を取らせる必要があります。

ボアズィチ大学での抗議運動は、女性にどのような影響を与えていますか？ これら2つの状況はよく似ています。学生たちは自校の学長を選ぶことを求め、女性たちは自分自身の人生の道を選ぶことを求めている。女性たちは、さらに多くの自由と、平等な権利のために闘うことを望んでいます。しかしこの闘いで生命を奪われる女性たちも多くいます。政府はある種の物事を進める力を持っていることは皆知っていますが、権利を求めて闘う学生たちを抑圧するためにその力を使うべきではありません。私たちは、政府が責任感のある学生たちをいかにすばやく制圧し、処罰するかを目撃しました。このようなエネルギーは、むしろ女性たちを守るために使われるべきではないでしょうか？

トルコ以外の国に住む人々はどのように支援できますか？ ソーシャルメディアで We Will Stop Femicide をフォローして、私たちの活動をシェアしてください。パンデミックの影響で、私たちのミーティングはすべてオンラインになっているので、誰でも参加できます。ぜひ私たちの声を届けるために手を貸してください。

CLING CLING FUMETTI BRUTTI

クリンクリン — ジョゼフィーヌ・ヨール・シニョレッリ

イラストレーター、そしてコミックアーティストとして活躍するFumettibrutti。単色で描いたグラフィカルなコマの中で、自伝的な日常生活のモンタージュを通して、性、愛、ジェンダー、クィアなどのテーマを掘り下げています。Fumettibruttiはイタリアで大きなブームを巻き起こし、オンラインでもオフラインでも、たくさんの熱狂的なファンを獲得しています。このペンネームは、イタリア語で「醜い漫画」という意味です。そこには、スタイルや伝統的なテクニックという概念にとらわれない、彼女自身の極めてユニークな技法が反映されています。漫画創作としてすでに確立されている伝統に照らしてみれば、彼女が描くビジュアル、そしてそこに添えられる言葉は、非常にダイレクトな本音であり、時に無遠慮ですらあります。こうした手法によって、彼女はクリエイティブな表現のいかなる部分も検閲せずに、読者と直接結びつけることができるのです。大人になることをテーマとした三部作が、Fumettibruttiの最も有名な作品です。彼女はイタリアで最も多く読まれ、最も多く話題にのぼるコミックアーティストの一人です。

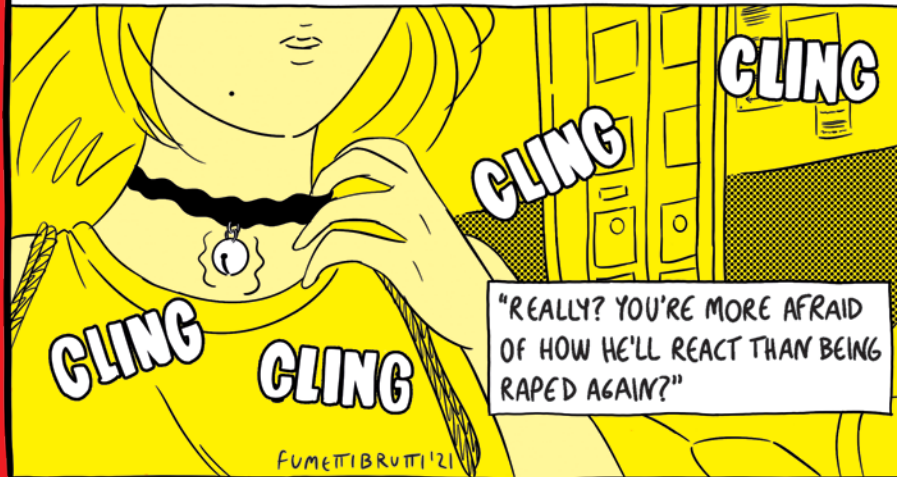
I HAD BEEN RAPED SEVERAL TIMES BEFORE, BUT AT THE TIME OF THE EVENTS I WASN'T IN A RELATIONSHIP.

AT THE END OF THE EVENING MY FRIEND D. ASKED ME IF I WANTED TO STAY OVER AT HER HOUSE.

"NEGATIVE." IF I DON'T WAKE UP IN MY OWN BED IN THE MORNING, I FEEL TERRIBLE.

CLING CLING

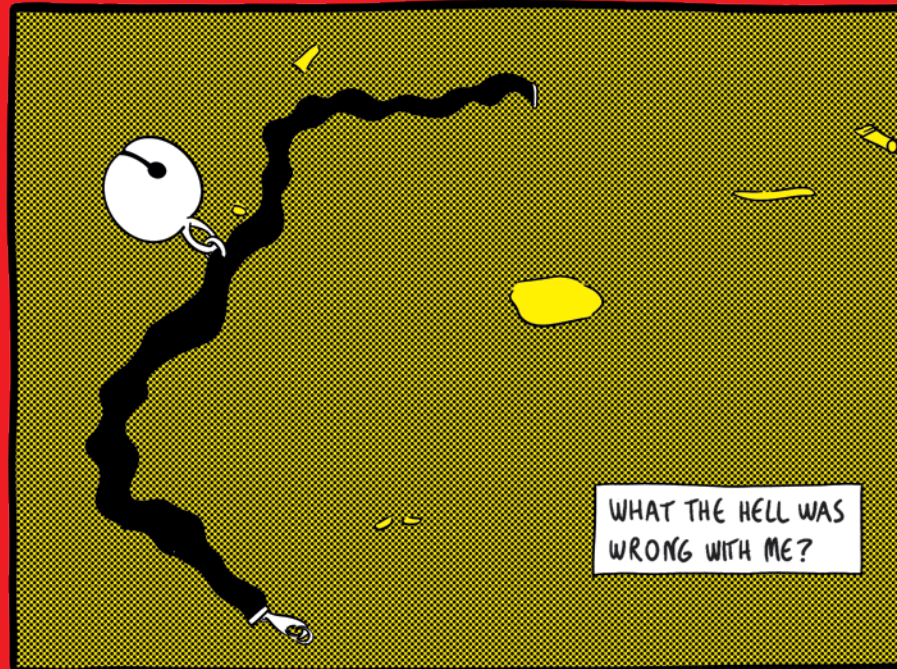
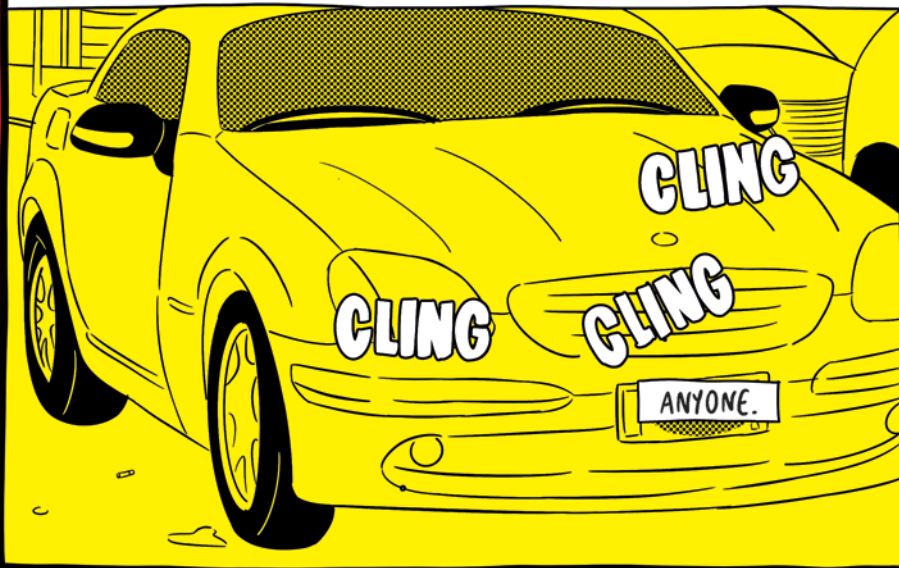
LIKE I SAID, IT ALREADY HAPPENED. THE VIOLENCE I MEAN, NOT THE KIDNAPPING (OR THAT TOO?), BUT AT THE TIME I WAS IN A RELATIONSHIP AND I WAS AFRAID THAT IF IT EVER HAPPENED AGAIN MY BOYFRIEND WOULD LOOK AT ME DIFFERENTLY.



"REALLY? YOU'RE MORE AFRAID OF HOW HE'LL REACT THAN BEING RAPED AGAIN?"

FUMETTIBRUTTI'ZI

SO I WALKED HOME. AT THAT LATE HOUR AND ON THAT ROAD, ANYONE COULD HAVE JUMPED OUT OF THEIR CAR AND CHUCKED ME IN THE TRUNK.



WHAT THE HELL WAS WRONG WITH ME?

COMPULSIVE ARCHIVE

PRESERVING ZINE CULTURE IN THE DIGITAL ERA

ジュリア・ヴァリチェリが運営する Compulsive Archive は、アーカイブであり、進行中の出版活動であり、長期的なプロジェクトでもあります。その目的は、パンクに関する知られざる出版物を再発見し、知名度を高めること。1990年代から2000年代にかけてイタリアで制作された、ライオット・ガールとクィアコアの同人誌もその中に含まれます。ジュリアとその友人である雑誌『CHIME』のアートディレクター MP5が、ローマの急進的なクィアフェミニストシーンの歴史を保存することの重要性について語ります。両者とも、15～20年前にこのシーンを体験し、その形成に影響を及ぼしました。**MP5：ジュリア、COMPULSIVE ARCHIVE はどんな経緯で設立されたの？**ジュリア：最初に興味を持ったのは、90年代の同人誌。パンクムーブメントに夢中になった私みたいなティーンエイジャーにとって、当時はこれが主なコミュニケーション手段だった。Compulsive Archiveの同人誌、書籍、レコード、その他の資料はどんどん増え続けていった。自分でも制作と配布を手掛けていたし、コピーも保管していたから。人々が私の作品やほかの人たちが発行した同人誌を注文できるように、カタログを印刷して、やり取りはすべて郵送。

コンパルシブ アーカイブ：デジタル時代における同人誌文化の保存

ネットショッピングがない時代だったってこと、忘れないでよ。当時のパンクシーンには、活発なレーベルがたくさんあった。イタリアにも、その他の国々にも。だから、独立系プロダクションの広大なネットワークを築くことができたわけ。女性アーティストとクィアアーティストが制作した作品を主に扱っていたのが、私が配布する同人誌と、レコードレーベルの Vida Loca。当時、これらの作品はイタリアではまだ新しかった。ライオット・ガールとクィアコアのムーブメントがちょうど影響力を持ち始めたばかりの頃。イタリアのフェミニズム系同人誌は、ほとんど私のカタログ経由で流通していた。もちろん、これはニッチな現象だったけど。わずか数十種ほどの出版物がコンサート会場や郵送で配布されていて、印刷部数も少なかった。いくつかの例外をのぞき、ほとんどがイタリア語で書かれてた。タイトルを聞けば、雰囲気は伝わるかな。『Clit Rocket』、『Sisters' Zine』、『Punto-G』、『Santa Riot』、『Le Streghe』、『Lyssa』、『Whooyeah!!!』とか。クィアコアの同人誌で特に印象に残っているのが、ミラノ発の『Speed Demon』。1992年から2008年まで出版されて、独自のラジオプログラムもあった。同人誌のほかに、ラジオもすごく効果的なコミュニケーション手段だった。Uova Sade、その後にApe Reginaが、「Feminist punk in Rome」っていう番組をやった。アーカイブを作るというアイデアを思い付いたのは、2016年に、少なくとも10年は放置されていた箱を開けた時。そして、ローマからミラノに引っ越そうと決めたんだ。2018年に、Compulsive Archive は予約制で利用できるスタジオとしてスタートした。ここには同人誌のほかに、同人誌とレコードに関連する手紙や文書が数え切れないほど保管されてる。ソーシャルメディアが登場するまでは、とってもカジュアルでフレンドリーな感じで、手紙を使ってコミュニケーションを取ってた。たぶん90年代の人たちが、手紙を書いていた最後の世代じゃないかな。私も関わっていた、90年代のシーンについて話をしよう。ライオット・ガールムーブメントはよく知っていても、クィアコアムーブメントはあまり知らないという人もいると思う。これらのムーブメントについて、少し聞かせてくれる？ 最近、Bikini Killが再結成されて、ライオット・ガールムーブメントがかなり

話題になってるよね。90年代に活躍した伝説のバンドだから、この頃に生まれたフェミニストのファンたちの多くは、ライブ演奏を見る機会がなかったはず。このバンドは、クィアコアバンドの Team Dresch と一緒に、1996年の春にイタリアツアーを実施したんだ。ライオット・ガールを端的に表すには、「フェミニストパンク」っていう言葉がぴったりじゃないかと思う。90年代初期にこのムーブメントが北米と英国でブームになったのは、第三波フェミニズムが活発化したせいもあるけど、80年代のパンクシーンが、特にコンサートで、性差別的な意味合いを持つようになったことへの反発もあった。初期、つまり70年代には、パンクムーブメントはむしろ自虐的でナイーブな性質のもので、中心には女性たちがたくさんいた。でも、80年代にハードコアコンサートのステージ裏で暴力が行なわれるようになって、それに反対する勇気のない人たちにとっては大きなマイナス要因になった。ライオット・ガールの最初の主導者たちは、そういう物理的な場所を自分たちのものにする必要性を感じていた。ただ単に楽しいことをするための場所だけじゃなく、社会的な結びつきと自己肯定の機会を体現する場所を。特にパンクに関しては、ステージ裏で起きることは、もしそういうことがあればの話だけど、バンドのパフォーマンスと同じくらい大切に、バンドと観客の間に距離がなかった。観客は、バンドメンバーと対等であると考えられていたの。ライオット・ガールとクィアコアは、分かちがたく結びついている。少なくとも、私はそう思う。どちらもほぼ同じ年代に生まれたというのが、その理由。クィアコアはもっと前に、より激しい冒涇を表現するホモコアムーブメントとして、80年代に生まれた。クィアコアは、「ゲイシーンにとってはあまりにパンクで、パンクシーンにとってはあまりにゲイ」と定義づけることもできるかな（ヨニー・レイサー監督のドキュメンタリー映画『Queercore: How To Punk A Revolution』参照）。私は、自分にクィアとしての一面があるからこそ、自分はフェミニストであると感じてる。同じように、フェミニズムはクィアシーンに欠かせないものなんだ。**あなたが先ほど言ったように、パンクカルチャーは私たちにとって大きな意味を持つ出来事だった。そして、フェミニストとして、そしてクィアとして、私たち**



は性差別主義的な側面を批判してきた。それから何が変わった？ アングラシーンには、今も性差別がある？ 政治的な要素を持つ現在のパンクシーンになじみ始めた人々は、フェミニストやクィアというトピックにかなり注目が集まっていることに気付くはず。性差別主義も、「有毒な男らしさ」という形でまだ残ってるけど。あらゆる対策がなされたにも関わらず、完璧に安全な環境を見つけるのは、ものすごく難しい。私がCompulsiveを創立した主な理由の一つが、パンクの歴史の中で、若い女性、トランスジェンダー、クィアのアーティストたちのストーリーを保存したかったこと。こういう人たちは、たいてい組織的に除外されるからね。私のアーカイブには、純粋に音楽にだけ関連があって、フェミニズムとはまったく関係のない同人誌と書籍もあるよ。私はそういうのも読むから。陰に隠しておけなくなった、知られざるストーリーにスポットライトを当てるっていう決意はしたけど。フェミニズムやクィアネスのように、長い間アングラシーンの一部になっていた多くのトピックが、ますます注目を集め、メインストリームになってきているよね。今、アングラカルチャーが取り組むべき問題は、ほかにどんなものがあると思う？ 対処すべき問題と、その必要のない問題を理性的に決めることは不可能だと思う。どの世代にもそれぞれの問題があるから、時代の背景や利用できる方法によって、解決策を考えないといけないでしょう。一部のトピックが主流になったり、すごく人気が出たという理由だけで、それを排除すべきではないよね。対処すべき問題は、たぶん変わっていないんじゃないかな。そういう問題に対する反応や、使われるツールが変わっただけで。今は、これらのトピックがそれぞれ共通項を見つけて、コミュニティのニーズに結び付けばいいと思ってる。スローガンとか表面的な熱狂ではなくて、今はすべてがオンラインになり、物理的な流通経路の多くがすでに存在しないけど、それでも同人誌を作る価値はある？ 同人誌について語るのは、今でも意味があるのかな？ 同人誌がほかの何かに変わることを想像できる？ ずいぶん少なくなったけど、幸運なことに、今も同人誌を販売できる場所はある。

自分でもずっと同人誌を買っているし、Compulsive Archiveのコレクションは90年代から現在までの作品を中心にしている、今もその数は増え続けてる。アーカイブに来る人たちがみんな、「どこでこんなに同人誌を見つけたの？」ってびっくりするくらい。コンサートやアングライベントに行くと、そこで買うことが多いかな。そういう機会は今もある。時々、興味を惹かれるストーリーに出会ってオンラインで注文することもあるし、独立系の出版社やアートフェアにも行く。こういうイベントは、ここ数年、世界中でブームになってるんだ。こういうアートブックフェアで、たまに自分のアーカイブから出版物を展示することもあるしね。数ある中でも、2009年にローマで行なわれたLADYFESTフェスティバルに関してあなたが制作したドキュメンタリー『LADYFILMINE』は、すごくおもしろいよね。この作品について少し教えてくれる？ 自分のレコードレーベルVida Locaに所属していたバンドと一緒にツアーをしながら、イタリアとヨーロッパのいろんなLadyfestに行った。Ladyfestは独立した非営利のフェスティバルで、2000年代初期に、コミュニティによって自発的に組織されたもの。90年代のライオット・ガールの集会に続いて、このフェスが初めて実施されたのが、ワシントン州オリンピア。フェミニストアーティストとミュージシャンの影響を世界中に広め、その存在に光を当てるためにね。このフェスには、クィアとトランスを肯定する雰囲気がいっぱいとあった。そして何年にもわたって行なわれたクィアのイベントHomo A GoGoフェスティバルにも、私は参加してた。Ladyfestがイタリアで最初に開催されたのは、2007年のトリノ。そして、2009年と2011年にはローマでも。私がLadyfestのドキュメンタリーを制作したのは、ローマ。撮影には、当時一番人気があったデジタルフォーマット、スーパー8とミニDVを使った。このドキュメンタリーではアナログとデジタルを混ぜ合わせたから、少なくとも一部では、70年代のフェミニストのイメージとの結びつきもある。この映画は4つのインタビューに基づいているけど、インタビューを受ける人は一度も映さないことにした。集合的な次元のストーリーを伝えたかったから。映画の鑑賞はこちら：
www.vimeo.com/123685499

KEEPING THE TRADITION OF RESISTANCE

FADILA KHALED

私の名前はファディーラ。アラビア語で「高潔」という意味。私の母は、高潔な娘を望んでいた。そして私は、母が高潔な娘を授かったと信じたかった。ただし、母が考えるそれとは別の種類の。私は10歳の時、真冬に18日間も、寝室の窓に顔をくっつけて過ごした。そこから見えたのは、反乱する人々。1月25日のエジプト革命で、人々がタハリール広場を行進して抵抗を示した時のように、私は「エイシュ、ホレヤ、アダラ エグテマエヤ（パン、自由、そして社会正義）」とつぶやきながら成長した。その1年後にはレジスタンスの歌をハミングしながら学校に通った。今でも絶望しそうなときや、どうしようもなくパニックに襲われた時は、その歌を口ずさむ。幸運なことに、私はもう一つの革命も目の当たりにし、オンラインでは小規模な革命に参加した。私の名前はファディーラ。今は20歳。グローバル・サウスで生まれ育ち、今もそこで暮らす若いアラブ女性として、自らの物語を語るために、3年半前のあるプラットフォームを創設した。それを始めたのは16歳の時。世界に向かって中指を立てたのだ。私は要求した。「私の話を聴いて。私は、留まるためにここにいる。私は、闘うためにここにいる。あなたが私の存在に脅威を感じるからといって、私は去るつもりはない。これが私の生きる意味だ」と。私はここにいる。そう、これが、私が毎日選択する反逆行為なのだ。私は光を恐れず、解放を恐れない。私は愛の力を信じ、私には自分の人生と自分の身体に関する選択をする権利があると信じ、自分の人生とコミュニティに影響を与える決断をする権利を持つと信じる。私は、グローバル・サウス出身の若い女性として、自分たちを代表する権利があると信じる。私のチームには、13歳から18歳まで、16人のティーンエイジャーがいる。みんな様々な地域の出身で、世界各国に拠点を持っている。私たちは、生殖に関する健康、性、政治、フェミニズム、そして社会正義のその他の要素に関して教育を授けようと努力している。私たちは、自分たちの文化、歴史、音楽、映画、文学を誇ってもいる。私たちは声を上げ、大胆で、ほとんど怖いもの知らずだ。そして私は、世界中にいる少なくとも数千人の

アラブ人ティーンエイジャーに、これほど多くを与えられることに感謝している。私の名前はファディーラ。私はナディーン・アシュラフに感謝する。私の友人、クラスメイト、アクティビスト、そして男性優位の社会と闘うためにストリートをオンライン化した Assault Police の創立者。私はゼイナ・アムルに感謝する。Catcalls of Cairo の創立者、アクティビスト、血縁以外のすべてで結ばれた私の姉。オンラインでの行進にもお礼を言いたい。私は、私たちの声を広げてくれた女性たち一人ひとりに、そして6月に口火が切られてから、勇気をもって声を上げてくれた女性たち一人ひとりに感謝する。私は、この動きを前に進めるために手を貸してくれた、ミレニアル世代の女性アクティビストたちに感謝する。特に、同世代のジェネレーション Z の仲間たちに。2020年6月初頭、ナディン・アブデルハミドが私たちの大学の Facebook グループに、公共広告を投稿した。かつて学生だった ABZ の手によるオンラインハラスメントの体験を扱ったものだ。同じく学生で、友人でもあるナディーン・アシュラフは、@AssaultPolice の名前で匿名の Instagram ページを立ち上げ、ABZ に対する証言（文字通り数百件ののぼった）をすべて公表した。Assault Police を通して多くの女性たちが名乗り出て、法的な報告を提出し、団結と抵抗のきっかけを作った。ジェネレーション Z 世代の女性たちの一団が、Twitter でハッシュタグ #قوة نسائية ثورية (フェミニズム革命の開始) を考案した。そして数時間のうちに、女性たちが各自のストーリーについて語り、男性が支配する社会文化の恥ずべき状況をシェアするのがトレンドになった。勇気を持ってそれぞれの虐待者を公にした女性たちを通して、数えきれないほどの報告と事象が明らかになった。私たちの仲間は、私たちのことを、改革の先頭に立とうと試み、これからもそうし続ける3人の若いフェミニストだと思っ

国でも、この世代の若者たちが影響を及ぼしている。私を知る、SWANA（南西アジアおよび北米）各国の若者たちは？彼らは戦いと革命の渦中で立ち上がった。流れる血潮に導かれて。パレスチナのヨルダン川西岸地区にいる私の友人たちは？歌を書き、曲を作りながら、実際の戦場で暮らしている。イラクの友人たちは？同じだ。シリアとイエメンの友人たちは？彼らも同様。レバノンの友人たちは、正義を求めて、また非宗教的な国家を求めて市街を行進している。2020年8月のバイルート港爆発事故の後には特に。これが私、これが私たち、これが私たちの育った環境。私たちの祖先は英国とフランスの植民地主義と闘い、私たちの祖父らは行進して最後に残った英国の権力を崩壊させ、エジプトを独立国家にするために力を貸し、私たちの両親とミレニアル世代の友人たちは暴力を受け命を奪われた。だから私は、ごくわずかな気付きを得ることができたのだ。エジプトでのフェミニストムーブメントは、若いエジプト人女性たちが語るストーリーを伝えるだけの動きではない。この動きがきっかけとなり、私たちの反抗心、抵抗心、そしてもちろん革命の精神が途絶えることはないことを証明することができた。そして、これからも証明し続ける。私はこの動きに参加していることを誇りに思うと同時に、仲間のためにもっと力を貸せなかったことを申し訳なく思う。私の名前はファディーラ。私はエジプト人で、イスラム教徒。私は、あなたの信仰や、あるいは信仰のなさを気にしない。あなたのジェンダーも、性的指向も、肌の色も気にしない。これこそが、私たちがあらゆる場所で闘い、手に入れようとしているものだ。私は、正義を、希望を、愛を、そして生きる権利を信じる。ただ生き延びることを強いらられるだけの存在ではないのだと。人として在りたい、私の望みはそれだけだ。しかし、私は、極めて暴力的な組織が重なり合う場所の中心に置かれ、容赦のない力で奴隷のように縛られ続けている。もしあなたが私たちを救いたいなら、私たちと共に闘ってほしい。もしあなたが私たちを救いたいなら、私たちに仕事を与えてほしい。もしあなたが私たちを救いたいなら、私たちを意思決定の場に加えてほしい。

**YOU THINK
THIS IS A SMILE
IT IS A WOUND
ON MY FACE
HEND KHEERA**



HOW MARGINALIZED GROUPS POWERED NIGERIA'S #ENDSARS MOVEMENT TAMI MAKINDE

ナイジェリアは、今もなお不安定な状況に苦しんでいる国である。2020年10月8日以来、国内の主要都市の市街とSNSのタイムラインは、ナイジェリア警察の特別強盗対策部隊（SARS）の廃止を求める若い抗議者たちで溢れている。現在は機能していないこの部隊に対する怒りは深く、単に警察の変革を要求するだけに留まらず、ナイジェリアの若者たちは、政府による過剰な制圧行為を根本的に変えることを求めている。10月20日、平和的に抗議する人々が軍隊に撃たれ、少なくとも十数人が死亡した。それ以降、ラゴスでの物理的な抗議運動は下火になっているものの、この動きはナイジェリアの近代史の中で、文化的に最も大きな影響を与えた出来事の一つとして報道されている。これは、ナイジェリアの女性たちの関与なしでは達成し得なかった、感嘆すべき偉業である。この運動の先頭に立ったのが、女性たちが運営する同盟組織Feminist Coalitionである。警察の暴挙に対抗するため、2020年の夏にダミロラ・オドゥフワとオドゥナヨ・エウェニイによって創立された。同組織は、10月に行なわれたデモの計画とクラウドファンディングに支援を提供し、極めて影響力の大きい役割を担った。活動の渦中に入るまで、彼らの中でもその影響の大きさを予測していた人は多くなかった。この抗議活動の大部分があちこちで主導者なしで行なわれたが、Feminist Coalitionに所属する女性たちは、ネットワークを広げることでこの運動に大きく貢献した。その輪の中では若い世代がリソースを集め、緊急事態に対応し、コミュニティにいる仲間を手を貸した。10月の抗議運動では、同組織はこのために合計で₦ 147,855,788.28（およそ388,000米ドル）の資金を集め、すべての支出に関しレポートを提供した。この国の文化に女性蔑視がいかに深く浸透しているかを思えば、これらの女性たちがもたらした影響はそれだけでも勝利であり、称賛に値する。しかし、ナイジェリア政府はいまだ、この抗議運動を重視すべきとはみなしていない。抗議者の要求を受け入れるつもりのない怠惰な姿勢、そして Feminist Coalitionの

**"NAIJA IS NOT A
WASTELAND,
OUR LIVES MATTER"**

**NO TO SARS
NO TO
CORRUPTION
NO TO
INJUSTICE
#ENDSARS**



メンバーに対する厳しい弾圧は、国民の声に耳を傾けない政府という事実の露呈以外のなにものでもない。現在まで、同組織の公式ウェブサイトはナイジェリアの地域ネットワーク上ではアクセスできない状態が続いている。これは完全に違憲な抵抗手段である。Coalitionのメンバーの多くが、脅迫、ハラスメント、ドッキングに直面したことを公言している。ナイジェリア政府によって渡航禁止者リストに加えられた人もいた。警察の暴力にまつわる対話は、しばしば何が暴力にあたるかという男性側の理解によって形成される。なぜなら、彼らの話がソーシャルメディアに頻繁に登場するからだ。このような立場に身を置くこととなったこれらの女性たちは、決して簡単ではない成果を達成した。彼女たちは自らの行ないによって、ナイジェリアの歴史にその名を刻むこととなったのだ。社会的な活動と変化に対する要求を奮い立たせた女性たちとして。ナイジェリアのLGBTQIAA+コミュニティも、同様の困難に立ち向かっている。現在のナイジェリアでは、同性愛はいまだに犯罪であり、ナイジェリア人のクィアたちは嫌がらせや迫害の恐怖から逃れられない。こうした現状により、多くがインターネット上で、そしてコミュニティの中で安全な場所を見つけることとなった。昨年10月の抗議活動で、ノンバイナリーアクティビストのマシュー・ブレイズが大胆にも、クィアたちを社会に含めるよう呼びかけるまでは。この21歳のアクティビストが、誰の耳にも聞こえるように「Queer Lives Matter」と唱えながらラゴスの街を歩く映像は、ネットで広く拡散されている。ナイジェリアにいるほかの多くのクィアたちと同じように、マシューもEndSARSの抗議に参加し、ナイジェリアのLGBTQIAA+コミュニティが明らかな迫害を受けていることに意識を向けながら、より幅広い

価値観の考慮を求めた。ナイジェリアを拠点とし、社会の隅に追いやられたコミュニティメンバーのために闘うことを目的としたNGO、Initiative For Equal Rights (TIERS)が、2019年に調査を実施した。その報告書には、実際の、または推測される性的指向やジェンダーアイデンティティに基づく人権侵害の事例が330件も示されている。しかし、こうした知識を得ても、LGBTQIAA+コミュニティは、正義を実現するために行進したいと願う人々から反発され続けている。ジェンダーや性別に基づくこうした格差がオンラインでも生じているが、それに対する反応は画一的である。一つのグループを除外するのは不適切な処置だが、仲間に入れることはより有害であるというものだ。人々から成る国家には、日陰に追いやられた最も脆弱な人々に対する扱いの質が反映される。女性とLGBTQIAA+という2つのグループの関与により、この先に待つ闘いに誰もが参加できること、そしてそうでなければならないことがようやく明らかになった。権力がいかに乱用され、暴虐的な構造がいかに維持されるか。その全貌をしっかりと思い描けるように、私たちはこのような社会の隅に追われたグループを、警察の暴力に抗う戦いの最前線に加えなければならない。誰もが参加できる総合的な社会活動を実行に移さないままでいれば、実際の変化はまだずっと先のことになるだろう。しかし、ナイジェリアの社会で迫害されているグループは、今こそ変化を始める時だと確信している。昨今は物理的な抗議は控えざるを得なかったが、マシュー・ブレイズのようなアクティビストたちは国際的なコミュニティに対し、迫害されている人々の声を広げ続けるように、そしてWomen's Health and Equal Rights Initiative、Oasis Project、TIERS Nigeriaのような取り組みに寄付をするようにと呼びかけている。

MEETING ROXANE GAY KEAH BROWN

ロクサーヌ・ゲイと出会って——キー・ブラウン

人はよく、「崇拜する相手には決して実際に会わないほうがいい」と言う。しかし、この言葉が私を引き留めることはなかった。数人の英雄たちと対面した経験から言えるのは、あなたの人生を劇的に変えた憧れの人だって、結局は、何よりもまず人間であるということ。恐れや不安を抱き、夢や願望を持ち、良い日もあれば悪い日もある人間なのだ。作家であり、アイコンであるロクサーヌ・ゲイに初めて会ったのは、2017年のサイン会だった。彼女のテーブルに近づくとつれ、私は汗をかき、脚が震え、胸が高鳴った。驚いたことに、ロクサーヌは「こんにちは、キー」と言い、私を温かく迎えてくれた。まるで宝くじに当たったような気がした。ロクサーヌが私のことをすでに知っていたなんて。私の著書『The Pretty One: On Life, Pop Culture, Disability, and Other Reasons to Fall in Love with Me』が2019年に出版された時、ロクサーヌはロサンゼルスで行なわれたプロモーションイベントのために、私と一緒にステージに立ってくれた。帰りのフライトでは夢見心地だった。それ以来、私たちは連絡を取り合っている。ロクサーヌ・ゲイは、実にパワフルな人間だ。私と同世代の女性たちは、彼女が綴る気まずい真実を貪るように読んだ。愛、黒人であること、クィアであること、肥満について。彼女は『Bad Feminist』と『Difficult Woman』を通して、私たち一人ひとりに直接話しかけてくれているようだった。彼女の勇氣ある率直さに触れることで、読者は自らの本当の姿をよく理解できる。ロクサーヌはそういうタイプの作家である。彼女の文章は多弁かつ多彩で、黒人であり、クィアであり、女性である私のようなファンの背中を押してくれる。作家として、またクリエイターとして、大きな夢を持ち、一生懸命働き、より多くを望むようにと。自分自身がそれなりに有名になると、私は衆目にさらされることの疲労感や恐怖心が理解できるようになった。実際にロクサーヌに会う

と、かなりシャイで物静かな印象を受けるかもしれない。彼女が一度話してくれたのだが、書くことで大胆になれるのだから。「私は間違いなく、ものを書く時は思い切ったことができる」と、彼女は言った。そして、「たぶん、いつも自分にこう言い聞かせてるからだと思う。『ロクサーヌ、心配しないで。どうせ誰も読まないから。いつものように、とにかく好きなことを書けばいいじゃない』ってね。そう考えると、本当に自信が湧いてくる。でも、成功すればするほど、そうやって自分をごまかすのがどんどん難しくなるんだよね」と言って笑った。しかし、ロクサーヌが黒人であり、クィアであり、母親であることに妥協せず、作家として成功した姿を見てきたことで、私も同じようにしているのだと思えるようになった。後に一冊の本となったエッセイを書いている時、私はもっと若い頃にどんな話を聞きたかったかを一生懸命に考えた。そして、その頃にいてほしかった、ロールモデルになることについても。人々はよくふざけて「見えないものにはなれない」と言うが、私はこれは真実だと思う。私はロクサーヌの作品の存在を知った時に、もっと大胆になり、もっと多くを求め、そして特定の枠にはめられることを拒否する勇気を手に入れた。ジャンルを超えて自分にとって大切なことを書き、社会の主流を占める人々に対し、それを尊重するよう求める黒人女性。彼女のそんな姿を見て、私は可能性に気付くことができた。ロクサーヌの作品に出会わなければ、この心境に辿り着くまでもっと長くかかっていたに違いない。『Hunger』を初めて読んだ時は、共感のあま

り何度も頷きながら、彼女の怒りを、恐怖を、そして悲しみを深く理解した。私の体とロクサーヌ・ゲイの体は同じではないし、まったく同じ方法で世界を体験しているわけでもないが、私たちはどちらも、自分の体にふさわしい慰めや可能性が与えられない世界で生きている。『Hunger』に描写されている脆弱さは私に衝撃を与えた。そしてその衝撃は、意図されたものだと思う。ロクサーヌは作品の中で弱い存在になることを自分に許し、そうすることで、読者が弱い存在になることも許すのだ。『Hunger』のせいで、私は自分自身に難しい質問を問うこととなった。自分の心を探ったら、どんな自分が見つかるだろう？この本が持つ親密さが私を刺激し、自分自身に対する親密な感情が生まれた。作家としてのロクサーヌは、確信を持ち、才能に溢れ、支援の手を差し伸べ、精力的に執筆する。友人としてのロクサーヌは、シャイで、愉快で、親切で、豊かな人間性に満ちている。私は、作品の中で、そして人生の中で、自分を解き放つことを許してくれた人のあらゆる側面を知ることができて光栄に思う。自分自身をもっと深く掘り下げ、恐れを乗り越えて直感を信じるように支えてくれた人。ロクサーヌがいるから、私はより良い方向に進んでいける。自分が信じる可能性の範囲を広げていいのだと、彼女が教えてくれるから。実現を目指して一生懸命に努力すれば、彼女の作品が私を動かしたように、私もいつか誰かの心を動かすようなものが書けるのだと。彼女とその作品を知ることができた幸運な人々は、誰もがより良い方向に進んでいけるのだ。

CREDITS

EDITOR IN CHIEF

ADAM ELI @adameli

ART DIRECTOR

MP5 @mp5art

CONTRIBUTORS

TOMBOYS DON'T CRY @tomboysdontry IG filters: **ILENIA AROSIO** @ileniaarosio

OLA JASIONOWSKA @olajasionowska_posters

KAROLINA GEMBARA @karolinagembara Ph: **JOANNA MUSIAL** @helena__joanna

GÜNSELI YALCINKAYA @moonbaby3000

MELEK ÖNDER @melekonderrr **WE WILL STOP FEMICIDE PLATFORM** @kadincinayetlerinidurduracagiz

FUMETTIBRUTTI @fumettibrutti

COMPULSIVE ARCHIVE @compulsivearchive Artwork: **LÀME STUDIO** @lamestudio.it

FADILA KHALED @fadilakhaled **HEND KHEERA** @hendkheera

TAMI MAKINDE @tamimak_ Ph: **NENGI NELSON** @nenginelson1

KEAH BROWN @keah_maria

TO GATHER TOGETHER TITLE COURTESY OF DANIELE LOMBARDI

CHIME @gucchiequilibrium

次号にご参加ください！本誌次号への参加を希望される方は、原稿をお送りください。文章でも、デッサンでも、マンガでも、絵画でも、詩でも、何でも構いません！**送り先**：zine@gucci.com. CHIME Zine についてもっと知りたい方は、iTunes または Soundcloud のグッチ ポッドキャストで、MP5 とアダム・イーライのインタビューをお聴きください。

TOMBOYS DON'T CRY は、あらゆるジェンダーの女性、そしてノンバイナリーの人々のためのプラットフォームです。創立者は、マーク (S/HE, DJ) とダフネ・ボジェーリ (TZAZIKY & CRAC, アーティスト)。このプラットフォームはミラノに拠点を置き、2011年から地域および世界各国のアーティストやDJと共に、ポストアイデンティ活動のコラボレーションを展開しています。**オーラ・ヤシヨノスカ**は、ワルシャワ在住のイラストレーター兼グラフィックデザイナー。2016年からワルシャワ市役所でアートディレクターとして働き、市の様々なイベントに協力して主要なビジュアルを担当しています。ポーランドの劇場や美術館とも頻りにコラボレーションを行ない、各施設のビジュアルブランディングを支援しています。ポーランドの女性権利運動のシンボルとなっている稲妻のデザインを考案したイラストレーターが、このオーラです。このデザインは、同運動を支援するポスター、チラシ、衣服などに使われています。**カロリナ・ゲンバラ**は、ポーランド人のフォトグラファーであり、アクティブリストです。彼女の作品は、家庭、帰属意識、移住、変化する土地、アイデンティティといったテーマが中心。最近では母国の政治情勢に焦点を当てています。また、写真をツールとして使ったり、コラボレーションの素材や制作の過程で取り入れることに興味があります。カロリナはビジュアルエージェンシーに関するリサーチに取り組み研究者であり、Sputnik Photosのメンバーでもあります。**ヨアンナ・ムーシャウ**は、ポーランド人のビジュアルアーティスト兼フォトグラファーで、ポーランドのクラクフにあるヤン・マテイク美術アカデミーのグラフィック学科を卒業しました。2018年に学士号を取得し、2020年に優秀な成績で修士課程を修了。現在はArchive of Public Protestsのメンバーになっています。彼女の作品はこれまでに、IPA Awards、IMFA Awards、TIFA Awards、Prix de la Photographieで入賞し、The Calvert Journal、Vogue Poland、National Geographic Poland、Die Zeit、Madrid No Frillsなどの雑誌に掲載されています。**ギュンセリ・ヤルチンカヤ**は、イスタンブール生まれの英国育ち。Dazed誌のライターであり、若者文化、アイデンティティ、セクシュアリティ、ビジュアルアート、音楽などのテーマを織り交ぜながら、AnOther、Aesthetica、Crack Magazine、Electronic Beats、Huck、Vogueにも寄稿しています。現在はロンドン在住です。**メレック・エンダー**は、2015年からWe Will Stop Femicide Platformに協力し、代表およびメディアコーディネーターを務めています。**FUMETTI BRUTTI**としても知られるジョゼフィーヌ・ヨレ・シニョレリは、1991年にカタニアで誕生。イタリアのコミックシーンで活躍中です。率直で辛辣、かつ心をざわつかせるようなテキストとイラストを使って、しばしば幻滅を交えながら、同世代のリアルな現実や夢を描いています。最初の出版作品は『Romanzo esplicito (露骨な小説)』。続いてフェミニズムをテーマとする漫画のアンソロジー『Post Pink』を出版し、その後『P. La mia adolescenza trans (P.私のトランス思春期)』を発表。また、同年に『Anestesia (麻酔)』と、アンソロジー『Sporchi e subito (汚く、今すぐ)』を上梓しました。**COMPULSIVE ARCHIVE**は、アーカイブであり、進行中の出版活動であり、長期的なプロジェクトでもあります。その目的は、パンクに関する知られざる出版物を再発見し、知名度を高めること。1990年代から2000年代にかけてイタリアで制作された、ライオット・ガールとクィアコアのファン同人誌もその中に含まれます。ミラノに拠点を置くコレクション兼アーカイブ、Compulsive Archiveの代表を務めるジュリア・ヴァリチェリは、長い年月をかけ、数え切れないほどの同人誌、レコード、チケット、手紙、初期のEメールなどを収集しました。**LÀME**は、多様なセクシュアリティとインクルージョンを支援するクリエイティブスタジオで、イタリアのミラノとボローニャで活動しています。創立者は、MG ボサニとユリ・ドストウニ。**LÀME**は、コミュニケーションのスタート地点と作られたステレオタイプの変化を目指し、バイナリズムからの逸脱を求めています。**ファディーラ・ハレド**は20歳で、カイロ・アメリカン大学で社会文化人類学とライティングを学んでいます。フリーランスライターとして活動しながら、不妊治療の専門家を目指して研修中です。また、SWANA (南西アジア・北アフリカ) 地域を中心とするプラットフォーム Teen Timesの創立者兼編集長として、アラブの若者が自分の意見を主張できる社会を目指しています。**ヘンド・キーラ**は、エジプトのストリートアート運動の先頭に立つアーティストであり、男性中心の世界で社会的に許容される範囲を広げようとしています。幼い頃から絵を描いてきたヘンドは、建築技師、ファッションデザイナー、デジタルファッションデザインインストラクターとして仕事をしながら、グラフィティが持つパワーとクリエイティブな表現力に注目。2011年のエジプト革命から、カイロのストリートで自らのアートを披露し始めました。その作品には、女性としての個人的な苦悩と、エジプトの社会通念に対する疑問が描かれています。さらに、セクシュアルハラスメントに反対するキャンペーンにも参加しています。**タミ・マッキンド**は、ナイジェリア・ラゴス出身の23歳。バイセクシュアルのフェミニストライターです。音楽、ファッション、カルチャーをこよなく愛するタミは、自分自身の言葉を使って、男性優位制度を少しずつ壊そうとしています。**ネンギ・ネルソン**はビジュアルアーティストとして、自分が観察したことを表現するために、写真と映像を用いています。彼女の作品に繰り返し現れるテーマは、アイデンティティ、選択、脆弱性、社会許容。ネンギにとってアイデンティティとは、特にアフリカでの社会通念を越えて「在り方」を見つめ直し、疑問を持つための手段です。コミュニティが自らのアイデンティティの迫害あるいは解放に果たす役割を考察しながら、自己理解を深めています。ネンギの作品は、ラゴス フォトフェスティバル、アリアンフランセーズ、African women board 2019、その他多数の出版物で紹介されています。**キー・ブラウン**は、ジャーナリスト、脚本家、俳優、作家として活躍中。2017年に話題を呼んだハッシュタグ #DisabledAndCuteを生み出し、2018年にはThe Roofで最も影響力のあるアフリカ系アメリカ人の一人に選ばれました。キーが夢中になっているのは、ポップカルチャー、音楽、映画、テレビ。彼女の作品は、The New York Times、Glamour Magazine、Marie Claire UK、Harper's Bazaarなど、数々の媒体に掲載されています。最初のエッセイ集『THE PRETTY ONE』は、現在Atria Booksから出版されています。また2022年には、Koklia Booksから絵本『Sam's Super Seats』が出版される予定です。



CHIME ZINE N.3

EQUILIBRIUM.GUCCI.COM
#CHIMEFORCHANGE